



夏の風物詩『浴衣』^{ゆかた}

いよいよ夏本番！お祭りや花火大会など、夏のイベントで活躍するのが「浴衣」です。日本の伝統衣装である浴衣は、平安時代、貴族が蒸し風呂に入る時に着た「湯帷子〔ゆかたびら〕」が始まりとされています。安土桃山時代には、湯上り着や寝巻きへと用途が広がり、江戸時代中期になると町人文化の発展に伴い「浴衣」に進化しました。今回は、『美しく・粋』に振る舞う浴衣のマナーをご紹介します。



着付けは「右前」

浴衣は、男女問わず「右前」で着用します。「右前」とは、右側が自分の手前になるように合わせることです。

着たときの衿合わせは、右側が下、左側が上に重なるのが正解です。"相手から見てアルファベットの"小文字の『y』に見えるように" "衿に「右手が入る」ように"と覚えましょう。



あると便利な持ち物

◆絆創膏

慣れない下駄で「鼻緒ズレ」をしたときのために持っていると安心です。



◆扇子・うちわ

扇子は、左胸前の帯に持ち手を下にして差し込み、うちわは背中中の帯に差し込んで携帯します。



◆ハンドタオル

帯が緩んできたとき、さっと挟めるハンドタオルがあると、それ以上の着崩れを防ぐことができます。

所作のポイント

◆腕をあげる時

ものを取るときや携帯電話を持って話すときは、動かす腕の袖口をもう一方の手で軽く押さえたり、つまんだりすると奥ゆかしくエレガントな印象になります。同時に、たもとを汚す恐れや肌の露出も防げます。

◆涼のとおり方

扇子やうちわを使うときは、自分の顔のすぐ下で、軽くゆっくりあおぐ程度にとどめましょう。お祭りなど、大勢の人の中にいるときは、周囲の迷惑にならないよう、袖口から腕やわきに向けて風を起こすのがマナーです。



◆階段の上り方・降り方

上がるときは、裾を踏まないよう、手で浴衣を少しつまんで上げ、足裏の「3分の2」ほどを階段に置いて上がるようにします。降りるときは、身体と足を少し斜めにし、足裏全体が階段に接すると安全です。

粋なしぐさは周りの方へのマナーにも繋がります。粋なしぐさで夏のイベントを楽しみましょう。

